進んで健康な生活を営む児童生徒の育成
～学校・家庭・関係団体の連携を図りながら～

１　はじめに

恵那市は、岐阜県南東部に位置し、愛知県と長野県に隣接した、山紫水明の豊かな自然に恵まれた地域であり、四季折々の姿を楽しむことができる。平成 16 年 10 月、旧恵那市と恵那郡の５つの町村（岩村町、山岡町、明智町、串原村、上矢作町）が新設合併し、新恵那市として誕生し、今年は15年目となる。人口構成を全国、岐阜県と比較すると、高齢化率が高くなっていて、少子高齢化が進んでいるとともに、今後はさらにその傾向が強まると予測される。

そういった中で、将来子どもたちを取りまく環境は大きく変化し、求められる能力もそれに伴い変化していくことが予想される。子どもたちが一人の地域社会人として生きていく未来を見据えたとき、変化する環境の中で、自らの手で課題を見つけ解決し、未来を切り拓きながら生き抜く力、すなわち「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する資質」を身に付けさせていくことが必要である。

本市の学校教育では、主体性・社会性・郷土愛を育むことを通じ、「ふるさとを愛し、学び続ける子どもたちの育成」をめざしている。そして、その実現を図るために、昨年度より市内全小・中学校をコミュニティ・スクールとして指定した。社会がますます目まぐるしく変化する今だからこそ、子どもたちを取りまく大人、学校・家庭・地域が連携を図りながら子どもたちを育成していくことが重要であると考える。

２　研究テーマの設定

（１）今日的な課題から

今日、子どもを取りまく環境は、都市化、少子高齢化、情報化、国際化などにより社会環境や生活環境ともに急激に変化している。こうした変化は、子どもたちの心身の健康状態や健康に関わる行動に大きく影響を与えている。

そして、子どもたちにおいても、夜ふかし、朝食欠食、睡眠不足、運動不足等の生活習慣の乱れ、過度なストレス、いじめ、不登校、自傷行為等のメンタルヘルスに関する問題、暴力、交通事故、アレルギー疾患、性の逸脱行動、喫煙、飲酒、薬物乱用、感染症（新型インフルエンザ、麻しん）などの様々な健康課題が顕在化している。社会や経済の変化に伴い、子どもや家庭、地域社会も変容し、生徒指導や特別支援教育等に関わる課題が複雑化・多様化しており、学校や教員だけでは、十分に解決することができない課題が増えている。

そこで、個々に合った対応や支援をするために、個々の実態を把握し、教職員一人一人が、自らの専門性を発揮するとともに、家庭や関係団体の専門スタッフ等の参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補いながら丁寧に取り組んでいくことで、子どもたちの健康な生活の営みをより充実していくことが期待できる。

（２）子どもの実態

子どもたちの住む恵那市は、平成 22 年男性平均寿命は、県内 21 市で最下位。生活習慣病をもつ市民や家庭が他市と比較すると多く、食事調査からは、塩分の過剰摂取と野菜不足が見られる。

子どもの学校保健に係る実態の一部は、以下の通りである。

・学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）をもつ子どもの数が、小学校ではやや増加傾向にある。（アレルギー）
・平成 30 年度、小学校５年生で LDL コレステロールが基準値より高い児童が 10.8％である。（生活習慣）
・ここ数年、恵那市の DMF 歯数の平均は、県より低く良好な状態が保たれている。（歯科）
・朝ご飯を毎日食べてきている子どもがほとんどだが、食事内容については十分でない家庭がある。（生活習慣）
・野菜栽培等、食に関する体験学習などにより、食への興味が高まってきている。（食育）
・発達に関する相談件数が年々増え、特別支援学級及び通級指導教室の在籍者や個別の支援を要する子

どもが増加している。（発達相談）

これらの実態に対し、学校・家庭・関係団体では、様々な取組を行っている。

- 「恵那市こども園・学校給食における食物アレルギー対応の手引き」や学校生活管理指導表を活用し、個々に合わせた指導を行っている。（アレルギー）
- 身体測定等のデータを活用し、肥満児童に対し、一人一人に合わせた指導を行っている。（生活習慣）
- 学校（養護教諭・管理職）と歯科医師との学習会を年１回行い、それを生かしながら歯科指導を行っている。（歯科）
- 学年・学級で、子どもたちの食への興味関心を高めるために体験学習を行ったり、栄養教諭が、調査結果をもとに実態に応じた食育指導を行ったりしている。（食育）
- 相談窓口を一本化し、巡回相談・発達検査等を行う中で多面的に実態を把握し、関係機関が連携しながら具体的な指導をしたり、専門性を高めるために、教師向け・保育士向けに定期的に勉強会を開催したりしている。（発達相談）

子どもたちの中には、望ましい健康な生活の在り方を分かっているが行動が伴わなかったり、困難さを抱える子どもたちは支援がないとうまくできずにいたりする。そこで、子どもたちが、自分にとってよりよい生活に気付き判断して取り組んだり、支援を受けながら取り組んだりできるようにする。これを繰り返すことで、進んで健康な生活を営む子が育ち、長い人生をより健康に生きることができる。

そのために、子どもたちの基本的な生活習慣を確立し、健康で生き生きとした生活を実感できるよう、価値付け方向付けすることで、子どもたちの健康に対する意識が高まり、主体的に健康な自らの生活を創り出す子どもたちが育っていくと考える。

恵那市内各小・中学校は、三師会や地域・行政とのつながりが深く、“進んで健康な生活を営む子どもたちを育てる”という思いのもと、連携を図りながら指導の充実を図っている。特別支援に係る連携では、教育・保健・福祉・医療等が連携し、「途切れのない支援」を目指して、情報を共有しながら必要な支援を一貫して行えるように支援体制を築いてきた。

学校・家庭・関係団体（三師会・専門機関）が、情報提供・情報共有、指導・助言、相談、啓発等、児童生徒の健康課題解決に向けて連携しながら取り組むことで、子どもたちがより健康な生活を営むことができると考える。併せて「チームとしての学校」の体制を整備することによって、教職員一人一人が、自らの専門性を発揮するとともに、専門スタッフ等の参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補いながら、個々に合った指導をしていくことで、子どもたちの健康な生活をより充実していくことができると考える。

そこで、本研究を通して、学校保健活動における連携の重要性を再認識し、今後、さらに取り組む必要がある事柄を洗い出し、効果的な連携の在り方を考えることで、進んで健康な生活を営む児童生徒の育成をしたいと考え、本テーマを設定した。

３　願う児童生徒の姿

- 健康に対する関心をもつことができる
- 基本的な生活習慣を確立することができる。
- 自己管理能力を高めることができる。
- 主体的に健康な自らの生活を創り出すことができる。

４　研究仮説

学校や教員が医療や心理・福祉等の専門家（専門スタッフ）や専門機関と連携を図りながら、児童生徒の健康課題解決に向けて取り組むことで、児童生徒の実態に応じた指導を行うことができ、児童生徒一人一人の生き抜く力を育成することができる。